

学 外 研 修 報 告 書

私は、学外研修員として出張しておりましたが、このたび研修を終えて帰任いたしました。
つきましては、次のとおりご報告申し上げます。

報 告 日	2025 年 6 月 3 日	所 属	外国語学部ドイツ語学科
職 名	准教授	氏 名	M. ラインデル 印
研修種別	1. 海 外 2. 国 内	研修種類	1. 長 期 2. 短 期
研修期間	2024 年 3 月 31 日 ～ 2025 年 3 月 31 日		
学外における主な研修機関および訪問先 ベルリン自由大学			
出張目的または研究題目 SNS を活用したドイツ語学習というテーマについての研究			
資 格	1. 2024 年度獨協大学学外研修員（派遣） 2. 本学承認の学外研修員（自費等） 3. その他（ ）		
大学から支給された費用（要清算書類）・補助金額		300 万円	
研修内容（1. 研修経過の詳細 2. 研究成果発表の予定 3. その他 を記入）			
1. 研修経過 研究テーマ「SNS を活用したドイツ語学習」では、二つのサブプロジェクトを扱っている。 一つは、目標言語の話者とのソーシャルメディア上でのやり取りを通じて言語習得の機会を自ら作り出している学習者についてのケーススタディである。もう一つは、チューターによる伴走のもとで、ディダクティスされた内容をソーシャルネットワーク上で学習者が扱う研究である。			

提出先：所属学部長→学長→人事課

裏面につづく

特に滞在の前半では、収集完了のデータの整理と分析に取り組んだ。両プロジェクトにおいて扱うのは、一方では学習者のインタラクションデータ、他方では学習者へのインタビューから得られたデータである。そのために、データを文字起こしし、翻訳し、分析のために整理した。インタビューの分析では、主に **MaxQDA** というソフトウェアを使用し、データを共通のテーマに着目して分析した。インタラクションの分析では、**clear cases** を特定し、詳細な分析を行うよう努めた。これと並行して、ベルリンの図書館環境を活用し、関係分野に関連する文献、とりわけ日本からの入手が困難な資料や最新の刊行物に触れることで、さらに理解を深めた。

また、学会やワークショップ、研究会の定例会に参加することにより、デジタルメディアを活用した教授・学習や、外国語に関するインタラクション研究の分野での専門的議論の最新動向を把握することにも重点を置いた。

2024年6月7日から8日にかけて開催された「DaFZにおける専門的学習コミュニティとインタラクション」のコンファレンスに参加した。自分の研究にとって、特に参考になったのは **Sandra Ballweg** 氏の発表だった。**Ballweg** 氏は、デジタル空間でのインタラクションを通じて共同の言語使用がどのように進行するかを示し、専門的学習コミュニティ (PDG) における言語の役割を強調した。

研究にとってさらに重要だったのは、「Tech AG」の定例会に参加したことである。この研究会は、ギーセン大学の **Graduiertenkolleg 8** におけるコロキウムから発展したものであり、外国語教育におけるデジタル・メディアに関心を持っている欧州の大学（主にドイツの大学）に所属する研究者から構成されている。定例会は学期中、おおよそ2週間に一度の頻度で開催された。ここでは、いくつかの重要な示唆を得ることができた。特に、教科書の役割に関する議論は、第一プロジェクトの理論的枠組みにおいて、このテーマをより重視する契機となった。特に重要だったのは、2024年6月13日から14日にかけて開催された **Tech AG** の年次大会である。その研究発表会は、**Justus-Liebig-Universität Gießen** の主催により、**Schloss Rauischholzhausen** にて「最新および予測される技術開発における外国語学習」をテーマに開催された。多くの専門家が参加し、最新の技術開発を踏まえた外国語学習について議論が行われた。この大会では、**Tamara Zeyer** 氏による「バーチャル形式でのキャリア開始：機会と課題」、**Lisa Middelanis** 氏による「オープンサイエンスと英語教育における持続可能なデータ管理」など、興味深い発表があった。また、

インタビューデータ分析についてのワークショップも行われ、自身のデータ分析作業においても重要なヒントを得ることができた。

年次大会のもう一つの焦点は「Didaktische Utopien」（教授法のユートピア）というプロジェクトであった。参加研究者たちは、デジタルメディアを活用した外国語教育の発展の流れに基づいて、今後数年間に期待される予測の発展、望ましい発展、そして問題となる発展について議論し、それらの動向をいかにして方向づけ、どのような影響があるのかを検討した。

この長期プロジェクトは年末に書籍という形でまとめられ、光栄なことに、私の寄稿もその一部として収録されることとなった。この寄稿の執筆は、今年度の研究活動における第二のテーマ的焦点として位置づけることができる。

私の寄稿では、将来の外国語教育における **Virtual Exchange (VE)** の可能性を考察した。**Virtual Exchange** とは、異なる文化的背景をもつ学習者同士が、教員の指導のもとで、ビデオ会議、フォーラム、チャットなどのデジタル・コミュニケーション手段を用いて協働的に学習を進める教育・学習の形態を指す。**VE** の目的は、異文化理解能力、語学力、専門的知識、そしてその他の汎用的スキルの育成にある。**VE** は **Telecollaboration** や **Online Intercultural Exchange** といった用語でも言及され、教育実践の場では **COIL (Collaborative Online International Learning)** としても広く知られている。私は、最新の研究動向と議論を踏まえながら、将来の外国語教育において **VE** がどのような役割を果たすかを検討し、それが教科書による授業に取って代わるのか、あるいは今後より当然の存在となるにせよ、従来型の外国語授業への補完的要素にとどまるのかを問いかけた。また、外国語教育における **VE** のさまざまな形態をいかに分類しうるかについても検討した。全体として、私は **VE** の普及が、タスクベースおよびプロジェクトベースの授業 (**TBLT**、**PBLT**) の成果、また **CLIL** に代表される内容と言語統合型アプローチの広がりに基づいて進展すると考えている。また、大学や国内外の関係機関・行政機関がこれまでの取り組みをさらに推進し、**VE** を積極的に支援する限りにおいて、そのポテンシャルは非常に高いと結論づけた。さらに、**AR** や **VR** 技術による仮想的プレゼンスの向上、**AI** 技術によるコミュニケーション支援（その場における言語的支援や、学習者の発話・成果の自動分析など）といった技術的進展についても考察し、その教育的意義を検討した。総じて私は、**VE** が外国語教育の制度全体に対して大きな影響を及ぼす可能性を有している

と論じている。その影響力は場合によっては AI を上回り、教育機関における外国語教育の構造そのものに変化をもたらす可能性もある。AI が多くの場合、既存のプロセスに統合される形で活用されることが予想されるのに対し、VE はそのポテンシャルが真摯に受け止められた場合、外国語授業のあり方そのものに影響を及ぼし得る。急速に発展する AI の存在にもかかわらず、人と人との出会いという要素が、将来の外国語教育において一層重要な役割を果たす可能性がある」と結論づけた。

2024 年 11 月 8 日から 9 日にかけて開催された「インタラクションと協力」というテーマの「Interaktion DaFZ」ワークショップ・発表会への参加は、SNS を活用した言語学習に関する研究と、Virtual Exchange に関する考察の双方にとって非常に重要であった。このワークショップでは、言語学習は学習者同士の協力とインタラクションの観点から議論された。Diana Feick 氏と Tamara Zeyer 氏は、バーチャルエクスチェンジのプロジェクトを扱い、ポッドキャスト制作を通じた協力的な学びについての研究を紹介した。また、Nicola Würffel 氏は過去数十年にわたる研究議論について批判的な概観を示し、とりわけ今後の研究課題を強調した。特に、VE の理論的基盤の強化の重要性が強調された。

このテーマ的焦点と密接に関連するのが、もう一つの研究グループでの活動である。ドイツ学術交流会の支援によるドイツ語学科連携プロジェクト「東アジアにおけるドイツ語教育研究」の枠組みの中で、オンライン・ドイツ語講座における学習者のインタラクションを研究するグループが存在する。この研究グループの月例会に参加するとともに、2024 年 6 月 13 日から 15 日にかけて獨協大学および麗澤大学で開催されたワークショップにも出席した。

このグループでは、異なる母語を持つ学習者が、オンラインでの相互作用の中でいかに協働体制を構築し、教師からのインパルスに応答し、困難を乗り越えていくかを研究している。本年は、国際学会での発表と、それに続く国際的な専門誌での論文投稿に向けた準備を行った。

同じくドイツ語学科連携プロジェクト「東アジアにおけるドイツ語教育研究」の一環として、私は年の中頃に、これまでの 3 年間の協力の成果を総括する出版物の執筆に、執筆者の一人として携わり、この論文はすでに刊行されている。この論文では、参加大学（獨協大学、ソウル大学、国立高雄科学技術大学、麗澤大学、フリードリヒ・シラー大学イエナ）の DaF（ドイツ語教育研究）担当者が、すでに成果を上げてきた協力分野について取り

上げている。それには、前述の研究活動に加えて、各国の学生を対象としたドイツ語のオンライン・コースおよびドイツでのサマー・コースの共同実施、ドイツ語教師養成のための共同プロジェクト、外国語としてのドイツ語の修士課程の学生を対象としたオンライン・コースの共同実施などが含まれる。

一年間にわたり、研究と学びに専念する貴重な機会を十分に活用することができた。自身の研究計画を進展させただけでなく、協定校の研究者やテーマ関連の研究グループとの協働を通じて、デジタルメディアを活用した外国語教育の分野における専門性を一層深め、その成果を学術コミュニティに還元することができた。このような貴重な機会を与えてくださった獨協大学に心より感謝申し上げるとともに、この一年の成果を今後の研究活動および教育への貢献として生かしていきたいと考えている。

2. 研究成果発表・その予定

- Schart, Michael, Huang, Ching-Shih, Lee, Mi-Young, Kusamoto, Akira; Raindl, Marco (2025): Das DaF-Netzwerk Ostasien als Impulsgeber für Lehre, Forschung und Lehrendenbildung. *Informationen Deutsch als Fremdsprache* 52/1, 147-158. <https://doi.org/10.1515/infodaf-2025-0006>
- Raindl, Marco: Die telekollaborative Wende? Rückblick-Preview auf 50 Jahre Virtuelle Austausche. In: Kilsbach, Sebastian; Korell, Lea; Knechtel, Luisa; Middelanis, Luisa (Hrsg.): Didaktische Utopien (発行準備中)
- Raindl, Marco: Autonomes Deutschlernen auf SNS. (執筆中、2025年度内発表予定)